

12世紀コンスタンティノープルの女性による慈善行為：アンナ・コムネナを手がりに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科 : 都市文化研究センター 公開日: 2018-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐伯(片倉), 綾那 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180402-006

◇研究展望◇

12 世紀コンスタンティノープルの女性による慈善行為

—— アンナ・コムネナを手がりに ——¹⁾

佐伯（片倉） 綾那

はじめに

ビザンツ帝国（330-1453 年）には、慈善行為によって弱者を保護する仕組みが存在した。弱者保護の顕著な例が、病院や救貧院、孤児院、養老院といった慈善施設を設立し運営することであった²⁾。これらの施設では、医療の提供や孤児の保護と世話、貧者や病人への衣食住の提供がなされてきた。デメトリオス・コンスタンテロスによると、ビザンツの慈善行為は、古代ギリシアから継承し、またキリスト教信仰に基づいたものであり、慈善施設の設立と運営が皇帝や教会の聖職者にとって徳のある行ないとされた³⁾。

それら施設群の多くは修道院に付属していた。施設の人員配置や報酬については、主に修道院の設立者が記した規約書（以下、テュピコンと記す）から読み取られてきた。施設で働く医師や施設の管理人の多くは男性であり、それぞれがどのような人物で彼らが帯びた役職について、ビザンツの病院の歴史の中で言及されている。人員の中には男性だけではなく女性も含まれていた。しかし個々の女性の詳細については分からない。

その中であって、医学知識を有し実践したビザンツ女性として知られる数少ない存在は、アンナ・コムネナ（生没年：1083-1153/54、以下アンナと記す）である。彼女はコムネノス朝（1081-1185 年）の創設者アレクシオス 1 世コムネノス（在位年：1081-1118）とエイレーネー・ドゥーカイナ（以下、エイレーネーと記す）の長子であり、高い教養をもつ女性であった。彼女の医学知識と実践は彼女の教養の高さを示す事象であるとされてきた。一方彼女は、帝位をめぐる実弟ヨハネス 2 世コムネノス（在位年：1118-1143、以下ヨハネス 2 世と記す）の廃位を企てるも失敗した（1118 年と 1119 年）陰謀者として、また父アレクシオス 1 世の事績を『アレクシオス 1 世伝』（1140 年頃成立、序章と全 15 巻からなる）⁴⁾ に描いた歴史家として、注目されてきた⁵⁾。

アンナの医療実践と関心についてはこれまで、前述の通り彼女の教養の高さを示す事柄とされ、またその行為

は、看護の歴史を語る際に、家庭内看護の一例として紹介されてきた。しかし同時代のビザンツ女性による慈善活動の枠組みの中では検討されているとは言い難い。筆者は、彼女が医療に関心を持っていた背景に、医療に従事する彼女と同時代の女性の存在があったのではないかと考える。

本稿では、アンナの医療実践を可能にした背景を浮き彫りにするために、最初に慈善活動を担った女性について考察する。次にヨハネス 2 世と妻ピロシュカ・エイレーネー（以下、ピロシュカと記す）が設立したパントクラートル修道院の慈善施設群と、アンナの母エイレーネーが設立したケカリトメネ女子修道院、アレクシオス 1 世再建の慈善施設群で行なわれていた慈善行為に関する研究を中心に整理する。そしてアンナの医療実践が表れている彼女の父アレクシオス 1 世の看護を伝える記事とその扱われ方をみていく。最終的に 12 世紀コンスタンティノープルの慈善活動からヨハネス 2 世治世を読み取ることの一段階としたい。

1. 慈善行為に従事したビザンツ女性

ここでは、アンナの役割を検討するにあたり、コムネノス朝期に慈善行為にかかわった女性を史料からみていく。

ビザンツ女性に関する研究は、皇帝権力との関係から皇妃研究が主流であった。しかし 1980 年代以降、女性史とジェンダー史の視点がビザンツ史にも取り入れられるようになると、皇族女性が自身の子どもの後見人として寡婦と母親の立場から政治に介入する姿と、文学サークルを主宰して知識人の創作活動を支援するという文化にかかわる姿が、主に欧米の女性研究者によって検討されるようになった⁶⁾。さらに 2000 年代に入ると、女性は家庭内での活動に制限されていたという考えを批判し、800 年から 1200 年代に生きた、皇族以外のビザンツ女

性を対象にした研究が登場する。具体的には、地方や首都コンスタンティノープルの市井や修道院、宮廷内の宴会の場、服飾、文学作品といった多様な場所に現れる女性を論じた論文集が発表された⁷⁾。

コムネノス朝期の皇族女性による慈善活動に目を向けると、アレクシオス 1 世の皇妃エイレーネーによる活動が挙げられる。彼女の活動は、『アレクシオス 1 世伝』に記されている。慈善活動に従事することは皇妃をはじめとする貴顕女性にとっても美德の一つとしてビザンツの全時代を通じて考えられていた⁸⁾。12 世紀の歴史家ヨハネス・キナモスは、ヨハネス 2 世の皇妃ピロシュカが困っている人々を助けるために自身の財産を使っていた、として皇妃を称賛している⁹⁾。皇族女性はいしばしば自身の財産で修道院を設立した。修道院は本来彼女たちの余生を過ごすためとして、また亡くなった家族を追悼する場所として建てられた。しかしこのような修道院は知識人たちの活動を後援するだけでなく、次章で述べるように、慈善活動が行われる場所にもなっていた。

2. 慈善施設群で働く女性

ではアンナと同時代の女性たちによる慈善活動はどのようなものであったのだろうか。そこでまず本項では、慈善施設で働いていた女性たちに関する先行研究を整理していくことにする。ここで取り上げる施設は、パントクラトール修道院とケカリトメネ修道院、アレクシオス 1 世が再建した慈善施設群である。

(1) パントクラトール修道院の慈善施設群

パントクラトール修道院¹⁰⁾は 1120 年頃、ヨハネス 2 世の妻ピロシュカによって隠修者のための施設として設立された。その後 1136 年 10 月、ヨハネス 2 世によって、修道院付属の病院と養老院、らい病患者のための施設を含む慈善施設群として再構成されている¹¹⁾。慈善施設群設立時、ピロシュカは亡くなっていたが、ヨハネス 2 世は自身と彼女の財産であった所領を、施設運営の費用にあてている¹²⁾。

ヨハネス 2 世は修道院を設立した際にテュピコンを起草した¹³⁾。修道院に所属する修道士の人数、附属する慈善施設運営にかかる財源、人員組織、さらに皇帝の家族の命日に行なうべきことを規定したものである。このテュピコンの内容は、同修道院の慈善活動を知る手がかりとして研究者によって注目されてきた。例えば、病院に関する記述では、スタッフの役職とそれに応じた給与額が示される。またこの記述からは、医療スタッフとして、数人の男性医師と女性医師 1 人、そして医師の下に正規の男性補助員 16 人と女性補助員 4 人、定員外の男

性補助員 8 人と女性補助員 2 人、女性の奉仕員が 3 人いたことが判明する¹⁴⁾。医療従事者以外の女性スタッフとして、洗濯を担う女性が 5 人いた¹⁵⁾。

ティモシー・ミラーはビザンツの病院の歴史を初めて個別に扱った 1985 年初版の研究書で、パントクラトール修道院の病院に一章を割いている¹⁶⁾。ミラーは同書で、この病院による医師養成のプログラムと医師が担った職務など、病院機能の実態を初めて紹介した。彼の研究を受けてポール・マグダリーノは、同病院が 12 世紀コンスタンティノープルにおける医療の中心地であり、専門的な医療従事者を育て機能させていたと指摘する¹⁷⁾。さらにエドワード・キスリンガーは、パントクラトールのテュピコンに書かれた病院の規約は設立者ヨハネス 2 世による理想であったと述べる¹⁸⁾。これに対してミラーは前掲書のペーパーバック版 (1997 年) において、テュピコンに描かれたパントクラトール病院での医療行為は単なる理想ではなく、その背景にビザンツ帝国の初期から存在した病院の存在とそこでの医療の実践があったことを挙げ、彼の主張に反論する¹⁹⁾。国内では大月康弘が皇帝設立の慈善施設とコンスタンティノープル市民との接点、また首都における社会福祉の役割に注目し、テュピコンの内容の中でも病院運営にあたっての財源やスタッフ、病院内でなされた行事に関する記事を分析している。またテュピコンに記された治療方法に関する規定から、治療と看護される人々の階層など病院の実情を読み取ろうと試みている²⁰⁾。そして同修道院と病院の運営に際し生じる物資の動きから、12 世紀ビザンツの首都コンスタンティノープルにおける経済活動を見出している²¹⁾。2013 年にはパントクラトール修道院に関する論文集が公刊された²²⁾。2016 年、アレクシオス 1 世とマヌエル 1 世 (在位年: 1143-1180) に比べて研究対象とされることが少なかったヨハネス 2 世時代に光を当てることを目的とした論文集で、同修道院のテュピコンが、ビザンツの修道院と付随する慈善施設群の運営状況を読み取るためだけではなく、ヨハネス 2 世その人の個性を読み取る上でも注目されるべき文書として言及されている²³⁾。

ミラーは施設で働く女性について、ビザンツの病院という限られた範囲の中だけで女性の立場を考察することは困難であると述べつつ、若干の考察を試みている。その際、パントクラトール修道院の病院と 13 世紀にミカエル 8 世パライオロゴス (在位年: 1261-1282) の皇妃テオドラによって設立されたリプス修道院の病院を比較している。両病院は女性スタッフを雇用していたが、女性の専門職の有無や立場が異なっていた。パントクラトールでは女性たちが専門的な訓練を必要とする職に従事していたが、リプスではそのような職は男性に限られていた²⁴⁾。パントクラトールには専門職員として女性医師が配置されていた。しかしその地位は男性医師の下位

であった。さらに彼女たちは女性患者の治療を担当していた男性医師の下に位置付けられ、受け取る給与は男性医師の半分であったことを指摘する。リプス修道院に専門職の女性が存在していなかった点についてミラーは、12 世紀から 1204 年のコンスタンティノープル陥落以降に西ヨーロッパの影響力が増したことが女性に専門的なキャリアを積む経験を閉ざした、と推測する²⁵⁾。

パントクラートルには、医療の専門職ではないがそれ以外の職能でもって働く女性も存在した。それがテュピコンで「グラプタイ (graptai)」と呼ばれる 4 人の女性である。彼女たちは修道院附属のエレウサ聖堂で孤児の世話と監督をする役目を担っていた²⁶⁾。テュピコンの編者ポール・ゴードイエによると、グラプタイは表記間違いであり、本来は「老婦人」を意味する「グライアイ (graii)」を指すのではないかと推測する²⁷⁾。しかしここではテュピコンの表記にあわせてグラプタイと呼ぶ。テュピコンの英訳では、グラプタイに「寡婦」を意味する“widows”をあてている。ミラーもグラプタイが寡婦であったとみなし、4 世紀から 5 世紀のビザンツ史料に身寄りのない子どもの面倒を見る寡婦が存在したことの延長としてグラプタイを見るべき、と主張する²⁸⁾。修道院で孤児を養育することは、その規模に大小あるもののコンスタンティノープルの修道院で見られる慈善事業の一つであり、パントクラートルもそのような修道院の一つであった、とミラーは指摘する²⁹⁾。

テュピコンから読み取れることは女性スタッフによる病院での活動実態というよりむしろ、スタッフの待遇と給与についてである。それを補うために同時代の他の慈善施設群で働く女性に関する研究もみていく。

(2) 他の施設群

ここではパントクラートル修道院の慈善施設群と同時期に運営されたケカリトメネ修道院と、アレクシオス 1 世によって再建された孤児院を含む慈善施設群における女性の活動を整理する。

ケカリトメネ修道院は 1116 年頃、アンナとヨハネス 2 世の母エイレーネーによってコンスタンティノープルに設立された³⁰⁾。24 人の修道女がここに住まい、エイレーネーと 2 人の娘（アンナとエウドキア）は敷地内に建てた皇族女性用の邸宅に暮らしていた。同修道院のテュピコンには、修道女の生活規則や修道女の人数、そしてエイレーネーの娘たちが不自由なく暮らせるよう、修道院が娘たちの女性家族に相続されるよう定められている³¹⁾。また、修道女の定員を 24 人以下とすること、しかしその定員には年長者と 2 人の少女も含まないことも規定されている。さらにこの「2 人の少女」を養育して教育し、しかるべき時に修道女として受け入れるよう、規定されている。この中の「2 人の少女を養って教育するように」、

という条項にミラーは着目する³²⁾。ミラーは、「2 人の少女」が孤児であったと指摘し、修道院が孤児を養育する場所として機能していた事例であるとみなす。ビザンツの修道制にジェンダーの視点からアプローチするリンダ・ガーランドもケカリトメネ修道院を取り上げている。その中で修道院が引き取った「2 人の少女」に言及しており、少女たちを養育する役目は、同修道院で働く修道女の仕事のうちの一つとしてとらえられている³³⁾。

次に同時代の慈善施設の事例として、アレクシオス 1 世によって再建された孤児院および慈善施設群の収容者の生活について触れたい³⁴⁾。その施設群には孤児だけではなく、病人や貧困者、けが人も収容されていた³⁵⁾。この施設群は、コンスタンティノープルのボスフォラス海峡と金角湾に面するアクロポリス地区と呼ばれた聖パウロ教会の周辺にあった。オスマン時代になると、同地にトブカブ宮殿が建てられ、現在はトブカブ宮殿博物館になっている。アレクシオス 1 世が亡くなったマンガナ修道院の近くである。これらの施設群とそこに滞在した人々の生活については、12 世紀ビザンツの歴史家ヨハネス・ゾナラスの年代記³⁶⁾と『アレクシオス 1 世伝』の第 15 巻第 7 章第 3 節から第 9 節³⁷⁾に伝えられている。その中の第 6 節に、少女に支えられた老女、そして目の見える男性に手を引かれた目の見えない男性、友人の手に支えられた手を失った男性、乳母に抱かれた赤ん坊、健康な人に世話される動けない人を、アンナ自身が見たと語る記述がある³⁸⁾。ルーシー＝リジリー＝セマーは、ここに出てくる付添人が訓練を受けた者ではなくお互いに世話をしあう同宿人であった、と考える³⁹⁾。

この光景はアンナ自身が目撃したものなのか、もしくは見た人から伝え聞いたものなのか分からない。しかし彼女はマンガナ修道院で父の看病をする中で、その近くに位置する慈善施設群でなされていた慈善活動や医療活動、またそれらの行為を受ける人々を目撃していた、と考えられる。アンナが医療に関する知識を持っていたのは、彼女が高い教養を身につけるのに可能な環境にあったからだけではなく、当時の考え方を共有していたためでもあると思われる。

3. アンナ・コムネナの医療知識と実践

ここでは、医療知識をもち実践した女性の例としてアンナ・コムネナを取り上げ、アレクシオス 1 世を看病したことを伝える記事を中心にその研究動向を整理する。

『アレクシオス 1 世伝』には、アレクシオス 1 世が皇帝に即位する前から亡くなるまでの事績が描かれており、中でも軍事遠征に関する記述が多くを占めている。しかしその中に、アンナは自身の誕生場面や受けてきた教育、

家族との思い出など彼女自身のことも記している。それ以外にもアレクシオス 1 世が妻エイレーネーを遠征に同行させて看護を求めているという記事もある⁴⁰⁾。同書の第 15 巻第 11 章第 1 節から第 19 節が、アレクシオス 1 世が主治医の治療を受けながらも家族の看病を受け、亡くなるまでの記事である⁴¹⁾。

記事の内容は以下のようなものである。エイレーネーは床に臥せったアレクシオス 1 世を毎晩徹夜で世話していた⁴²⁾。その時アンナは、哲学の勉強をうちやってアレクシオス 1 世の脈拍と呼吸を診るのに忙しかった⁴³⁾。アンナの妹マリアはエイレーネーに言われて、冷水とバラのエキスをアレクシオス 1 世にかけて失神状態から回復させた⁴⁴⁾。アレクシオス 1 世は大宮殿の南向きの部屋に移動したが、その後それまで臥せっていた大宮殿からマンガナ修道院へと移転した⁴⁵⁾。アレクシオス 1 世の治療方針を決めていたのは主治医であった。しかし、時にアンナはエイレーネーの言いつけで、主治医たちによる治療方法をめぐる話し合いに同席し、彼らの見解に意見することもあった⁴⁶⁾。

この記事は 1118 年 8 月の出来事が記される。記事中、アレクシオス 1 世を看病する家族は女性のみで男性は出てこない。この中でアンナは、ヨハネスは病床の父を置いて即位するために大宮殿に向かった、とだけ伝える⁴⁷⁾。13 世紀ビザンツの歴史家ニケタス・コニアテスは、アレクシオス 1 世の重病を述べつつ、この頃アレクシオス 1 世の後継者をめぐるアンナとエイレーネー側の動きと、それに対抗するヨハネスの動きを伝えている⁴⁸⁾。アレクシオス 1 世を看病する女性とそれをせず宮殿に向かった男性（ヨハネス）の姿を並べた記事は、ヨハネス 2 世と帝位をめぐる争った陰謀者としてのアンナの一面を検討する研究で、アンナによるヨハネス 2 世批判の一つであるととらえられてきた⁴⁹⁾。しかし上記の記事で述べられた妻や娘がアレクシオス 1 世に施した処置は、家庭内看護の例として、看護の歴史でも注目されている⁵⁰⁾。

アンナが医学を勉強し実践していたことは、『アレクシオス 1 世伝』に加えて『アンナ・コムネナへの追悼文』からも読み取られてきた⁵¹⁾。この追悼文の著者は 12 世紀ビザンツの知識人ゲオルギオス・トルニクスである。彼はエイレーネーとアンナがケカリトメネ修道院で主宰していた文学サークルの一員であり、アンナの娘とも書簡をやりとりするなど交流があった。彼は、1153 年とされるアンナの没後すぐに、この追悼文を書いたといわれる。ジョージナ・バックラーは、アンナと主治医のやりとりから、彼女の医学知識の高さを指摘し⁵²⁾、またアンナが主治医たちの間で治療方針が異なった際、彼らの仲裁人としての役割を自認していた、と指摘している。彼女はアンナと医師たちの関係をパトロンとクライアントの関係であったとみる⁵³⁾。ミラーは、ビザンツ著述家

が医学と慈善行為を結び付けて考えていたという背景から、トルニクスによる称賛をアンナの医学知識に対する称賛ととらえている⁵⁴⁾。アンナのそれは、同時代の高い教養をもっていた皇女であっても珍しいこととされながらも、母エイレーネーをはじめとする同時代の貴顕女性による影響を受けている、とみなされている⁵⁵⁾。

アレクシオス 1 世の治療は主治医が担っていた。しかしアンナはこの記事の中で、彼女の妹マリアが施した処置や、医師たちによる治療方針を決める話し合いにアンナが同席したことも、エイレーネーの指示によるものであったと述べている。彼女はアレクシオス 1 世の看護役も兼ねて遠征に同行するなど、医療の心得があったのだろう。アンナの医療への関心と実践は、母エイレーネーの影響もあったといえよう。

おわりに

本稿では、アンナが医療を学び実践した背景に、12 世紀コンスタンティノープルの慈善施設群で働く女性の存在が影響を及ぼしていた、という仮説を検討するために、それぞれの先行研究を整理してきた。ここで本稿のまとめと今後の可能性を述べる。

アンナが医学知識を持ち実践していたことは、先行研究で共通の認識として受け入れられている。ミラーは、パントクラートルとリプス両修道院を比較して慈善施設で働く女性について若干の考察をしているものの、包括的になされているとは言い難い。パントクラートル修道院附属病院のテュピコンに表れる女性医師や補助員、他のスタッフのそれぞれの経歴を特定することはできない。しかしテュピコンから読み取れる女性スタッフの姿は、男性スタッフとは給与の額に違いがあるものの、男性と同じ役割を担うよう定められていた。以上の規定から、テュピコンを編纂したヨハネス 2 世が専門知識を持つ女性スタッフに抱いていた何らかの価値観や認識をここに見出すことはできるであろう。ビザンツ女性による慈善活動を考える上で、12 世紀の病院に専門知識を有した女性が配置されていたこと、同時代人であるアンナが有していた医学知識と技術を合わせて考えることで、アンナを病院と女性史をつなぐ存在として取り上げることができないであろうか。

アンナは『アレクシオス 1 世伝』に、母エイレーネーや妹マリアと共に父アレクシオス 1 世をどのように介抱したか、また主治医による治療方針をめぐる話し合いに自身が加わったことを記す。これらの記事は、ヨハネス 2 世が運営していた病院に女性医師がいたことの反映と考えられないだろうか⁵⁶⁾。1136 年以降に運営されていたパントクラートル修道院と慈善施設群についてアンナ

は何も語っていないが、その当時暮らしていたケカリトメネ修道院内の邸宅で、パントクラトールの慈善施設群における運営を見聞きしていた可能性がある。パントクラトールとケカリトメネの両修道院の場所はそれほど隔たっていなかったからである。またケカリトメネには、母が主宰していた文学サークルを引き継いでいたアンナのもとに、知識人など人の出入りがあった。彼女は彼らから修道院外の情報を聞くこともあったであろう。彼女が『アレクシオス1世伝』の執筆にあたり入手した情報の中にはヨハネス2世の政策に関するものもあり、パントクラトールの慈善施設群の運営と活動も含まれていたであろう。彼の病院に女性医師とその補助員、孤児を養育する女性が働いていたことも彼女は知っていたと思われる。

さらにアンナは『アレクシオス1世伝』に、アレクシオス1世が孤児院、貧者やけが人を収容する施設を改修し運営していたことを記す。彼女は入所した人々が助け合って生活する姿を目撃していたという。実際に彼女が目撃したのかどうかは確証できないが、この慈善施設群があった場所は、アレクシオス1世の看病のために過ごしたマンガナ修道院と離れていないことから、その可能性はありうると言わねばならない。さらにケカリトメネ修道院が2人の少女を引き取って養育していたことも、当然見聞きしていたであろう。この修道院は、彼女が暮らしていた場所であったからだ。アンナが『アレクシオス1世伝』に慈善活動や医療に従事する女性を書いたことは、当時の貴顕女性にとって徳ある行いであったからだけではなく、自らの体験と入手した情報をもとにヨハネス2世時代に運営されていたパントクラトールの慈善施設群からも影響を受けていたためではないか、と筆者は考える。本稿で取り上げたアンナの記事から、12世紀コンスタンティノープルの女性による慈善活動と医療実践を読み取ることによって、コムネノス朝時代の中でも近年注目されているヨハネス2世時代の一面に光をあてることができるのではないだろうか。

近年の中世ヨーロッパ史研究では、医療を含めた慈善施設群で働く女性に着目し、女性が医療の場で直接患者の身体に手で触れる存在として注目されている⁵⁷⁾。アンナが父を看病する場で医学知識をもとに実践した治療行為を、上記の研究傾向に基づいて男性医師よりむしろ患者に直接触れる立場にある女性の一例とし、これを確認することを今後の課題としたい。11世紀末の第一回十字軍を境として人と物資の往来が多くなったとされる12世紀コンスタンティノープルに焦点を当て、医学知識と実践経験のあるアンナを軸としてビザンツにおける女性の医療実践を見ていくことで、中世ヨーロッパにおける女性の活動の一端をも明らかにしうるであろう。それについては、稿を改めて考えたい。

註

1. 本研究の一部は、平成28年公益財団法人日本科学協会、笹川科学研究助成より研究費の支援を受けた。
2. Kazhdan, A. P. (editor in chief), Talbot, A. M. (executive editor), Cutler, A. (editor for art history), Gregory, T. E. (editor for archaeology and historical geography), Ševčenko, N. P. (associate editor), *Oxford Dictionary of Byzantium*, New York, 1991, pp. 1649-1650.
3. Constantelos, D. J., *Byzantine Philanthropy and Social Welfare*, 2nd (Revised) Edition, New Rochelle, New York, 1991. 同書は、ビザンツにおける社会福祉制度と慈善施設群に関する基礎研究となっている。
4. 本稿では以下のギリシア語版と英訳版を参照する。Anna Komnene (recensuerunt: Reinsch, D. R. et Kambylis, A.), *Annae Comnenae Alexias*, *Corpus Fontium Historiae Byzantinae* 40, Berolini, 2001; Anna Komnene (trans. by Sewter, E. R. A., Revised with Introduction, and Notes by Frankopan, P.), *The Alexiad*, London, 2009. 以下、「Alexias, 巻, 章, 節, 頁; *The Alexiad*, 頁」と記す。
5. Buckler, G., *Anna Komnena a study*, Oxford, 1929 (reprint London, 1968); Hill, B., “A Vindication of the Rights of Women to Power by Anna Komnene”, *Byzantinische Forschungen* 23, 1996, pp. 45-53; Hill, B., “Actions Speak Louder than Words: Anna Komnene’s Attempted Usurpation”, in T. Gouma-Peterson (ed.), *Anna Komnene and Her Times*, New York and London, 2000, pp. 45-62; 佐伯綾那「アンナ・コムネナの描く「ポルフェログネトス」——12世紀ビザンツ歴史書『アレクシオス1世伝』より——」, 博士学位請求論文, 大阪市立大学, 2016年。Neville, L., *Anna Komnene: the Life & Work of a Medieval Historian* [Onassis series in Hellenic culture], New York, 2016.
6. Mullett, M., “Aristocracy and Patronage in the Literary Circles of Comnenian Constantinople”, in M. Angold (ed.), *The Byzantine Aristocracy, IX to XIII Centuries*, Oxford, 1984, pp. 173-201, reprint, M. Mullett, *Letters, Literacy and Literature in Byzantium*, Hampshire, 2007; Garland, L. (ed.), *Byzantine Women: Varieties of experience AD 800-1200*, Publications for the Centre for Hellenic Studies, King’s College 8, Aldershot, 2006; Hill, B., *Imperial Women in Byzantium 1025-1204: Power, Patronage and Ideology*, Edinburgh Gate and New York, 1999, pp. 153-180.
7. Garland, L., *Byzantine Empresses: Women and Power in Byzantium, AD527-1204*, London, 1999; Hill, B., *Imperial Women in Byzantium 1025-1204: Power, Patronage and Ideology*, New York, 1999.
8. Hill, *Ibid.*, pp. 158-159.
9. Ioannes Kinnamos (ed. Meineke, A.), *Ioannis Kinnami Epitome Rerum ab Ioanne et Alexio Comnenis Gestarum*, *Corpus Scriptorum Historiae Byzantinae*, Bonn, 1836, pp. 9-10; John Kinnamos (trans. by Brand, C. M.), *Deeds of John and Manuel Comnenos*, New York, 1976, p. 17.
10. パントクラトール修道院の建物の一部はトルコ共和国の首都イスタンブールに現存しており、15世紀以来ゼイレク・キリセ・ジャーミーという名でモスクとして利用されている。しかし慈善施設群の建物は現存していない。
11. 大月康弘「第1章 ビザンツ国家と慈善施設——皇帝・教会・市民をめぐる救貧制度」, 長谷部史彦編著『中世環地中海圏都市の救貧』, 慶応義塾大学出版会, 2004年, 3頁。
12. 大月康弘「第五章 ヨハネス二世と帝国病院——皇帝寄進とコンスタンティノープルの福祉——」, 『帝国と慈善』, 創文社,

- 2005年, 160頁。
13. Gautier, P., “Le typikon du Christ Sauveur Pantocrator”, *Revue des Études Byzantines* 32, 1974, pp. 1-145; John II Komnenos (trans. by Jordan, R.), “*Pantokrator: Typikon of Emperor John II Komnenos for the Monastery of Christ Pantokrator in Constantinople*”, in J. Thomas and A.C. Hero (eds.), *Byzantine Monastic Foundation Documents, vol. 2*, Washington D.C., 2000, pp. 725-781.
 14. “Christ Sauveur Pantocrator”, pp. 100-101; “*Pantokrator*”, p. 763.
 15. 大月「ヨハネス二世と帝国病院」, 166-167頁。
 16. Miller, T. S., *The Birth of the Hospital in the Byzantine Empire*, Baltimore and London, 1985, Paperbacks edition, 1997, pp. 12-29.
 17. Magdalino, P., *The Empire of Manuel I Komnenos, 1143-1180*, Cambridge, 1993, pp. 361-366.
 18. Kisliger, E., “Der Pantokrator-Xenon, ein trügerische Ideal?”, *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 37, 1987, pp. 178-179.
 19. Miller, *The Birth of the Hospital*, p. xix.
 20. 大月「ヨハネス二世と帝国病院」, 174-176頁。
 21. 同上, 154-177頁。
 22. Kotzabassi, S. (ed.), *The Pantokrator Monastery in Constantinople*, Berlin, 2013.
 23. Stathakopoulos, D., “John II Komnenos: a historiographical essay”, in A. Bucossi and A. R. Suarez, *John II Komnenos, Emperor of Byzantium, In the Shadow of Father and Son*, London and New York, 2016, pp. 5-6.
 24. Delehay, H. (ed.), “Le typicon de monastère de Lips”, in *Deux typical byzantins de l'époque des Paléologues*, Brussels, 1921, p. 134; Theodora Palaiologina (trans. by Talbot, A. M.), “39. Lips: Typikon of Theodora Palaiologina for the Convent of Lips in Constantinople”, in *Byzantine Monastic Foundation Documents, vol.3*, p. 1281.
 25. Miller, *The Birth of the Hospital*, p. 214.
 26. この聖堂では12人の孤児を養育していた。彼らもまた修道院内で有給の仕事を持っていた。Miller, T. S., *The Orphans of Byzantium Child Welfare in the Christian Empire*, Washington. D.C., 2003, p. 129.
 27. Gautier, “Christ Sauveur Pantocrator”, p. 76, n. 9; 大月「ヨハネス二世と帝国病院」, 167頁。
 28. Miller, *The Orphans*, pp. 111-112.
 29. *Ibid.*, pp. 128-129.
 30. 修道院の建物は現存しておらず、正確な場所は不明である。しかしその場所はマグダリーノやヘリンによって推測されている。推定場所は、パントクラートル修道院とそれほど離れていない。Magdalino, P., “Medieval Constantinople”, *Studies on the History and Topography of Byzantine Constantinople*, Ashgate, Variorum, 2007, pp. 2-4; ジュディス・ヘリン著, 井上浩一監訳, 足立広明, 中谷功治, 根津由喜夫, 高田良太訳『ビザンツ 驚くべき中世帝国』, 白水社, 2010年, 443頁 (Herrin, J., *Byzantium: The Surprising Life of a Medieval Empire*, Princeton, 2008, p. 363)。
 31. Gautier, P., “Le typikon de la Théotokos Kécharitôméné”, *Revue des Études Byzantines* 43, 1985, p. 40; Irene Doukaina (trans. by Jordan, R.) “*Kecharitomene: Typikon of Empress Irene Doukaina Komnene for the Convent of the Mother of God Kecharitomene in Constantinople*”, in *Byzantine Monastic Foundation Documents, vol. 2*, p. 652.
 32. Miller, *The Orphans*, p. 132, n. 88.
 33. Garland, L., “‘Till Death Do Us Part?': Family Life in Byzantine Monasteries”, in N. Brown and L. Garland (eds.), *Question of Gender in Byzantine Society*, Ashgate, 2013, p. 45.
 34. これらの施設群には、アレクシオス1世がトルコ遠征で捕虜にした女性や子供たち、けが人が収容された。同章の第1節と第2節には、アレクシオス1世が捕虜を連れ、また略奪品を伴い遠征先から首都へ帰還する様子が描かれている。*Alexias*, XV.vii.1-2, pp. 481-482; *The Alexiad*, pp. 450-452.
 35. コンスタンティノープルでもっとも有名な孤児院とみなされており、その設立時期は6世紀以前と考えられている。*Oxford Dictionary of Byzantium*, p. 1537.
 36. ゾナラスによると、アレクシオス1世はそれまで閉鎖されていた孤児院を改修した。さらに彼は自らの財産で養老院を改修して世話の必要な老人を宿泊させ、また修道士と修道女のための宿舎も建設した。また彼は資産のない両親の子どもや身寄りのない子どもに教育を与える目的で文法学校を作り、教師とその弟子の扶助についても定めた。Ioannes Zonaras (edidit Büttner-Wobst, T.), *Ioannis Zonarae Epitomae Historiarum vol.3*, Bonnæ Impensis Ed. Weberi, 1897, pp. 744-745; Johannes Zonaras (Übersetzt eingeleitet und erklärt von Trapp, E.), *Militärs und Höflinge im Ringen um das Kaisersertum: Byzantinische Geschichte von 969 bis 1118*, wien, 1986, p. 169. ゾナラスが語るアレクシオス1世による慈善施設の改修と施設への援助は、アンナの叙述と一致している。しかし彼の叙述は、彼女の叙述に比べて簡潔である。彼の記述姿勢は、出来事のみを簡潔に記すという年代記の規則に則ったものである。
 37. *Alexias*, XV.vii.3-9, pp. 482-485; *The Alexiad*, pp. 450-452.
 38. *Ibid.*, XV.vii.6, p. 483; *Ibid.*, p. 453.
 39. ルーシー＝リジー＝セマー著, 小玉香津子訳『看護の歴史』, 医学書院, 1978年, 50頁。
 40. *Alexias*, XII.iii.6, p. 366; *The Alexiad*, p. 339.
 41. *Ibid.*, XV.xi.1-19, pp. 493-503; *Ibid.*, pp. 463-471.
 42. *Ibid.*, XV.xi.8, pp. 496-497; *Ibid.*, pp. 466-467.
 43. *Ibid.*, XV.xi.15, p. 500; *Ibid.*, p. 469.
 44. *Ibid.*, XV.xi.16, p. 501; *Ibid.*, p. 470.
 45. *Ibid.*, XV.xi.9, p. 497; *Ibid.*, p. 467.
 46. *Ibid.*, XV.xi.3, p. 494-495; *Ibid.*, p. 465.
 47. *Ibid.*, XV.xi.17, p. 501; *Ibid.*, p. 470.
 48. Niketas Choniates (recensuit, Dietsch, I. A.), *Nicetae Choniatae Historia*, Corps Fontium Historiae Byzantinae 11, Berolini, 1975, p. 7; Niketas Choniates (trans. by Magoulias, H. J.), *O City of Byzantium, Annals of Niketas Choniates*, Detroit, 1984, p. 6.
 49. 片倉綾那「ビザンツ皇女アンナ・コムネナの帝位への挑戦——アレクシオス1世コムネノスの後継者争い(1118-1119年)をめぐる——」, 『ジェンダー史学』第4号, 2008年, 46-47頁。
 50. セマー前掲書, 68-76頁。
 51. Georges et Dèmètrios Tornikès (tradition et notes par Darrouzès, J.), *Lettres et discours*, Paris, 1970, p. 23.
 52. Buckler, *Anna Comnena*, p. 178.
 53. *Ibid.*, pp. 218-219.
 54. Miller, *The Birth of the Hospital*, p. 56; Georges et Dèmètrios Tornikès (tradition et notes par Darrouzès, J.), “14. Éloge d'Anne Comnène”, in *Lettres et discours*, pp. 307-308.
 55. Brown, A. R., “Psalmody and Socrates: Female Literary in the Byzantine Empire”, in Brown and Garland (eds.), *Question of Gender*, p. 73.
 56. 『アレクシオス1世伝』がヨハネス2世の治世を反映していた

という考えは、他の叙述を取り上げることで検討されてきた。それについては、佐伯（片倉）綾那「研究展望 12世紀の歴史書『アレクシオス1世伝』をめぐる研究動向」、『都市文化研究』第17号、2015年、83-85頁で言及している。

57. 久木田直江『医療と身体の図像学——宗教とジェンダーで読み解く西洋中世医学の文化史——』、知泉書館、2014年、133-162頁。久木田は同書で、ジェンダー視点を取り入れて中世ヨーロッパの医学と医療について、古代ギリシアやイスラム世界から継承された医学や医療従事者の存在を踏まえ、女性の身体観や妊娠・出産や医療活動、施療院でなされたケアについて検討している。